



TITLE:

10代に発生した膀胱癌の1例

AUTHOR(S):

小六, 幹夫; 丹田, 均; 加藤, 修爾; 大西, 茂樹; 中嶋, 久雄; 南部, 明民; 新田, 俊一; 赤樫, 圭吾

CITATION:

小六, 幹夫 ...[et al]. 10代に発生した膀胱癌の1例. 泌尿器科紀要 1999, 45(10): 711-712

ISSUE DATE:

1999-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/114137>

RIGHT:

10代に発生した膀胱癌の1例

三樹会病院 (院長 : 丹田 均)

小六 幹夫, 丹田 均, 加藤 修爾, 大西 茂樹
中嶋 久雄, 南部 明民, 新田 俊一, 赤樫 圭吾A CASE OF TRANSITIONAL CELL CARCINOMA
OF THE BLADDER IN A JUVENILE PATIENTMikio KOROKU, Hitoshi TANDA, Shuji KATO, Shigeki ONISHI,
Hisao NAKAJIMA, Akihito NANBU, Toshikazu NITTA and Keigo AKAGASHI

From the Sanjukai Hospital

A case of transitional cell carcinoma of the bladder in a 18-year-old female is presented. Cystoscopic examination revealed a papillary tumor on the left lateral wall. Histopathology of the excised tumor showed transitional cell carcinoma, G1>2, pT1a. Recurrence has not been observed for about 1 year, after intravesical pirarubicin therapy.

(Acta Urol. Jpn. 45 : 711-712, 1999)

Key words: Bladder cancer, Juvenile patient

緒 言

20歳未満の若年者に発生する膀胱癌は稀な疾患である。今回、われわれは18歳女性の膀胱移行上皮癌を経験したので文献的考察を加えて報告する。

症 例

患者 : 18歳, 女性

主訴 : 下腹部不快感

既往歴 : 17歳時に女兒出産。他に特記すべきことなし。喫煙歴はなかった。

家族歴 : 特記すべきことなし

現病歴 : 1998年8月頃から下腹部不快感出現。近医内科での超音波検査にて膀胱腫瘍が疑われ当院紹介となった。膀胱鏡にて左側壁に大豆大の非乳頭状広基性腫瘍を認めた。

現症 : 特記すべき異常所見なし

入院時検査所見 : 検尿にて赤血球 20~30/hpf, 白血球 (一)。尿細胞診 class I。排泄性腎盂造影では上部尿路に異常所見なし。骨盤部 CT では筋層への浸潤は認めなかった。

以上より表在性膀胱腫瘍の診断にて9月9日、経尿道的膀胱腫瘍切除術を施行した。

組織学的所見 : 移行上皮癌, G1>G2, pT1a (Fig. 1)。

術後経過 : 術後の経過は順調でテラルビシン 10 mg+シタラビン 100 mg の膀胱内注入療法を週1回, 8週間行った。術後約1年経過するが, 再発なく経過している。

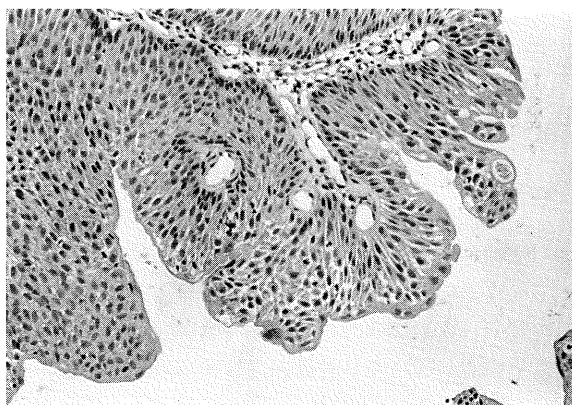


Fig. 1. Histopathological finding (H.E. ×200) Transitional cell carcinoma G1>2, pT1a.

考 察

20歳未満に発生する膀胱癌は稀で、本邦では自験例を含め35例が報告されている¹⁾。Javadpour ら²⁾は20歳未満の発生頻度は0.4%, 市川ら³⁾は0.5%と報告している。当院では1978年の開院以来1,047例の膀胱癌を治療しているが20歳未満の症例は本症例が初めてであった。男女比は本邦報告35例では19:16であり、成人の膀胱癌の男女比3.5:1とは異なり、若年者では男女の較差が少ないことが特徴である。

本邦で報告された20歳未満の膀胱癌の主訴は35例中31例が血尿であり、そのうち28例が無症候性であった。膀胱癌の場合膀胱鏡により確定診断されることが多いが、若年者の場合膀胱鏡を敬遠することも多く、初診から診断までに時間を要した例も報告されてい

る⁴⁾。腹部超音波検査は簡便、非侵襲的でもあり、若年者の場合でも血尿が持続する場合には膀胱癌を疑い積極的に施行すべき検査であると思われる。

本邦報告例の35例のうち腫瘍の形状の記載が明らかな31例の検討では、単発24例(77.4%)、多発7例(22.6%)であった。病理組織学的には移行上皮癌が30例(85.7%)であり、異型度についてはG1が16例(55.2%)、G2が12例(41.4%)、G3は0例であった。また深達度については記載の明らかな22例中1例で筋層浸潤を認めている。一般に若年性膀胱癌は低悪性度、非浸潤性、予後良好と言われている⁵⁾。しかし朝倉ら⁶⁾は若年性膀胱癌はDNA-histogram上 aneuploid の出現を認める症例もあり、細胞生物学的にはすべてが low malignancy ではないと報告している。治療方針については他の年齢層と同様に病期や癌細胞の悪性度により決定されるべきである⁷⁾。本邦では初発20年後に癌死している症例が1例⁸⁾、再発例が5例あり、再発予防を含めた経過観察は他の年齢層における膀胱癌と同様に慎重に行うべきであると考えられた。

結 語

18歳、女性の若年性膀胱癌の1例を報告し、若干の文献的考察を加えた。本症例は文献上本邦35例目で

あった。

文 献

- 1) 山田 徹, 鈴木基文, 藤田喜一郎, ほか: 若年性膀胱移行上皮癌の1例. 泌尿器外科 **11**: 61-64, 1998
- 2) Javadpour N and Mostofi FK: Primary epithelial tumors of bladder in the first two decades of life. J Urol **101**: 706-710, 1969
- 3) 市川篤二: 膀胱癌の遠隔調査. 日泌尿会誌 **49**: 602-610, 1958
- 4) 熊本悦明, 塚本泰司, 坂 丈敏, ほか: 小児膀胱移行上皮癌の1例. 臨泌 **30**: 341-345, 1976
- 5) Khasidy LR, Khashu B, Mallett EC, et al.: Transitional cell carcinoma of bladder in children. Urology **35**: 142-144, 1990
- 6) 朝倉博孝, 橘 政昭, 馬場志郎, ほか: 若年発症型膀胱腫瘍の細胞生物学的特性に関する検討. 日泌尿会誌 **80**: 1218-1223, 1989
- 7) Kurz KR, Pitts WR and Vaughan ED: The natural history of patients less than 40 years old with bladder tumors. J Urol **137**: 395-397, 1987
- 8) 本村勝昭, 松田博幸, 大塚 晃: 若年に発症し20年経過した膀胱移行上皮腫瘍の1例. 日泌尿会誌 **81**: 1099, 1990

(Received on March 18, 1999)
(Accepted on July 17, 1999)